日本の交響作品展――七

青春の作曲家たち

青　春　讃　　芥川也寸志

単に青春と言えば，それはおそらく，心の問題であろう。50才の青春，60才の青春もないとは言えない。

しかし，作曲家にとって青春の―― と言えば，それは丁度，人生における青春時代と同じく，再びかえることのない，貴重な，若き日々における創作生活を指すことになろう。

その時代の作品は，それから後の作曲家本人を，逆に創っていくことになる。

小倉　朗	25才
松平頼則	32才
渡辺浦人	32才
戸田邦雄	26才
別宮貞雄	34才

日本の音楽史を刻み込む，それぞれ貴重な作品群である。

新交響楽団第99回演奏会

日本の交響作品展 ——7

青春の作曲家たち

指　揮　芥川也寸志
ピアノ　土屋律子
演　奏　新交響楽団

1910　1920　1930　1940　1950　1960　1970　1980

1916
小倉　朗
Roh Ogura

1941
交響組曲　イ短調
Symphonic Suite in A minor

第Ⅰ楽章　アレグロ
Ⅰ. *Allegro*
第2楽章　アレグロ・リトミコ
Ⅱ. *Allegro ritomico*
第3楽章　アンダンテ
Ⅲ. *Andante*
第4楽章　アレグロ
Ⅳ. *Allegro*

1907
松平頼則
Yoritsune Matsudaira

1939
南部子守唄を主題とする
ピアノとオルケストルの為の変奏曲
Thème et Variations d'après d'une berceuse de Nanbu

1915
戸田邦雄
Kunio Toda

1943
交響幻想曲「伝説」
Fantaisie Symphonique "Lègande"

1909
渡辺浦人
Urato Watanabe

1941
交響組曲「野人」
Suite "YAJIN"

第Ⅰ楽章　集り
Ⅰ. *Assemblage——Allegro non troppo e leggiero*
第2楽章　祭り
Ⅱ. *Rite——Andante con tristezza*
第3楽章　踊り
Ⅲ. *Dance——Allegro ben marcato*

1922
別宮貞雄
Sadao Bekku

1956
管弦楽のための「二つの祈り
"Deux Prières" pour Orchestre

第Ⅰ楽章　悲しみをもって
Ⅰ. *Douloureux*
第2楽章　雄々しく
Ⅱ. *Vaillant*

---

*1983*年*4*月*3*日(日)*2*時
東京文化会館

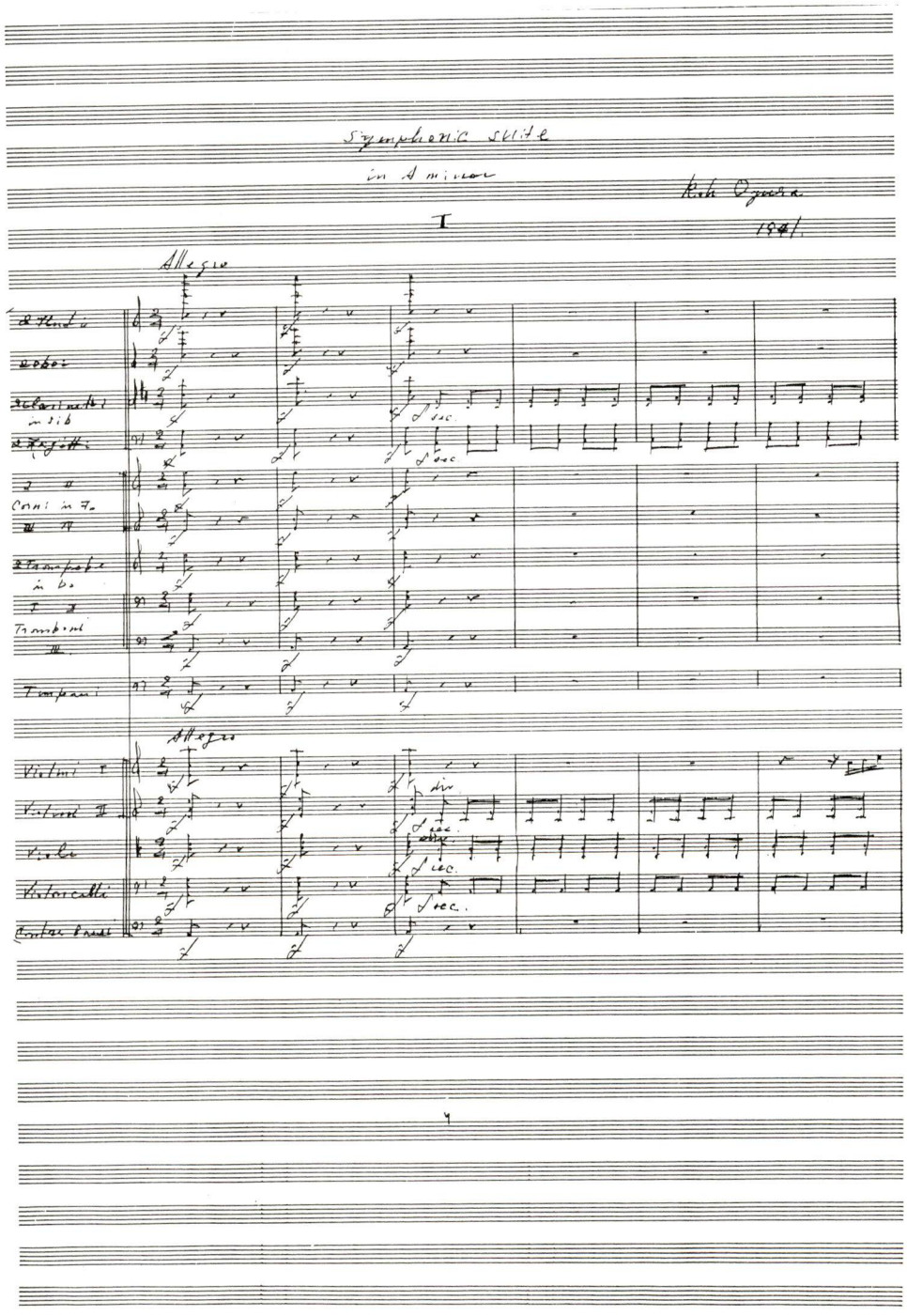
後援／毎日新聞社
協賛／日本作曲家協議会
主催／新交響楽団

交響組曲 イ短調

作曲年代 1941年
初　演 1941年1月19日
マンフレッド・グルリット指揮
中央交響楽団
演奏時間 24分

楽器編成 2 Flauti, 2 Oboi, 2 Clarinetti, 2 Fagotti, 4 Corni, 2 Trombe, 3 Tromboni, Timpani, Quintetto di Archi

使用楽譜 作曲者所蔵スコア





小倉朗

写真・木之下　晃

私の青春

「私の青春」という題で書けといわれて，何やら気が重い。当年とって67才，何も今更——というわけではないのだが，振りかえって僕の青春を思うと，うんざりすることばかりが先に立つ。これでは読む方もやっぱりうんざりするだろう，と思うのである。にもかかわらず，この「うんざり」をあげてゆくと，少年時代に始まった戦争がとめどなく広がって，とうとう第二次大戦に至り，やがて敗戦でおわる。その間，どんな愚劣な社会があり，生活があったかは，書くもおろか。戦争でまけて海軍から出てきたのが29才のとき，野郎どもざまあみやがれと思ったと同時に，よくぞ生き残った，という感慨があった。

子供のころから，体の方は「ひょろひょろ」で，この「ひょろひょろ」を利用して，戦中はさぼったり，命拾いをしてきたようなものだが，この体では不治の病だった結核にかかっていずれは死ぬだろう。それでも戦争で殺されるよりはずっとましだと，永いこと考えていたのである。

そんな考えと仲よしになっていたということは，生きることにいい加減うんざりしていたからに相違ない。実際，誰がこんな世の中で役に立つような人間になるもんか，という気分が，誰が戦争なんかにいくもんか，という「つっぱり」と同じくらい強かった。そこでどうしたかというと，結局のところ実社会向きの階段には登らずに，音楽に飛び込んで解決する。このときだけは，暗闇で太陽に出会ったような気分だった。

だがしかし，この希望も極めて不安定なものでしかない。つまり，そんな状況で音楽をやっていくには，よほどの楽才や腕前が保証されていなければダメなのだ。あのころの日本の洋楽，そこに飛び込んではっきりとわかったのは，何とみずからのみじめにも未熟なことだったか。これは丁度，水に飛び込んだら，泳げなかったことに気がついたというくらいの悲劇だろう。そこでもがいて浮いたり沈んだり，つまり希望と絶望の間をいったりきたり——。

こうしてとうとうドイツ古典にとりついて，ここでの勉強に安心立命を見出すことになるのだが，話はそれでは終らない。厄介なことに，そういう僕にいつのころからか小さな悪魔が住みつくようになっていた。僕はこいつにラヴェルの音楽の標題を借りてひそかに「スカルボ」と名づけていたが，このスカルボは本来動物的で，若葉が青々と茂って花が開く——そんな植物的な「青春」のイメージをものの見事に打ち壊し，うんざりするような青春を展開する。

以上，これら「うんざり」の事々は，かつてささやかな自伝を書くことで，一応のけりをつけた。しかしそれでも，人のいう「青春」がどこかに残っているとすれば，もしやあのころのささやかな作品の中ではあるまいか。たとえば僕が門外不出ときめ込んでいた「交響組曲」を，芥川さんが再度とりあげてくれるのも，その「青春の歌」のせいかも知れない。
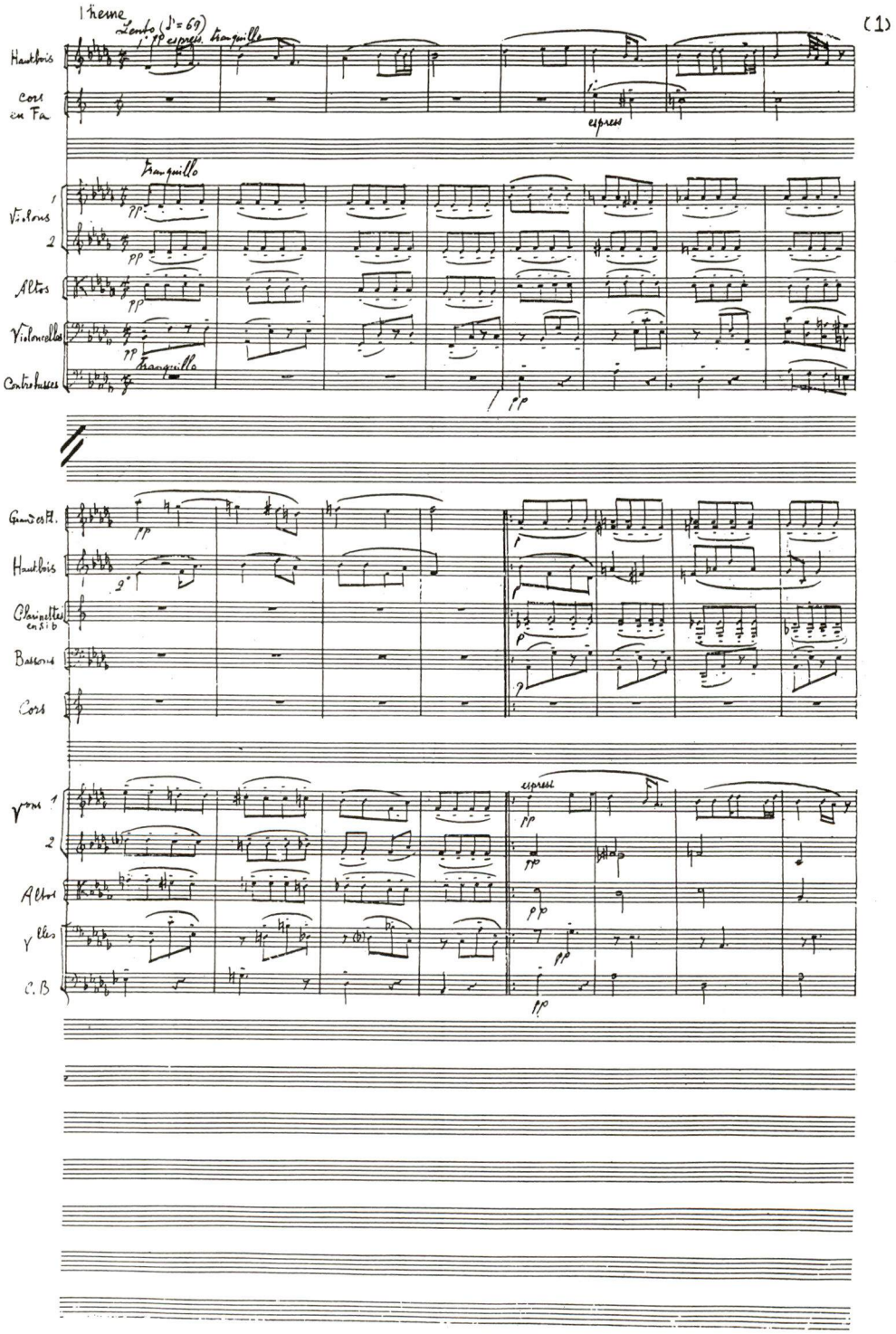
南部子守唄を主題とする
ピアノとオルケストルの為の変奏曲

作曲年代　1939年

初　　演　1939年12月17日（放送）
山田和男指揮　本加すみれ独奏
日本放送交響楽団

演奏時間　14分

楽器編成　1 Petite Flute, 2 Grandes Flutes, 2 Hautbois(II Cor anglis), 2 Clarinettes, 4 Cors, 3 Tropettes, 3 Trombones, Tuba, Piano, les instruments a cordes



松平頼則



写真・木之下　晃

1939年にＮＨＫでは“国民詩曲”と題する放送用の管弦楽曲のシリーズを作曲家達に委嘱していた。

放送の関係上、時間の制約はあったが、形式等に関しては全く作曲家達の自由であった。私は当時熱中していた南部地方の民謡の中から盛岡地方の子守唄を択び、それに６つの変奏曲をつけた。６つという数字には別に意味があるわけではなく、所要時間の計算が簡単になるような初等数学的思いつきに過ぎない。実際に演奏で歌われるわけではないが、参考の為、下に歌詞を書いておこう。

（盛岡地方の子守唄）

ねんねろやーエ　こーろころ
ねんねこして　おひなたち
小豆まんまさ　でこかてて
もしもそれが　おいやなら
白いまんまさ　鮭のよ

放送は1939年12月17日、指揮：山田和男、ピアノ：本加すみれ、日本放送管弦楽団により初演。

この作品は管弦楽曲としては「パストラール」の次に書いたもので、当時私が私淑していた多くの作曲家達の影響がある。就中ポーランド／フランス系のタンスマンの影響が多く、随所に現われる増４度の音程がそれを物語っている。

作曲者としては無調風の第三変奏曲、歌謡風の第四変奏曲が気に入っている。しかし何分自己の作風を確立するはるか以前ではあるし、その後も自分のスタイルらしきものを発見するまでは何度も脱皮しなければならなかった。この作品はその後放送は勿論、ステージでも一回も演奏されたことがない。今回、芥川也寸志氏の好奇的！　御厚意によって約44年ぶりに陽の目を見るわけである。実はこれより12年後に書かれた「ピアノと管弦楽の為の主題と変奏」とは特に変奏曲の形式の点で近親関係にある。後者はかなり華やかな道を歩いているのに引き換え、この褐色の地味な作品は静かに眠っていた。現に今日も同じ文化会館の小ホールで同じ時間帯に「ピアノと管弦楽の為の主題と変奏」に基づくピアノ・ソロの為の新しいヴェルシオンが佐々木弥栄子さんのリサイタルで初演されることになっている。私は新しい作品の誕生を祝福するために、小ホールに行かねばならず、物理的に44年ぶりの作品に再会することは不可能である。折角の企画並びに指揮の芥川也寸志氏、ピアニストの土屋律子さん、それに新交響楽団の方々に深くおわびと、そして感謝の意を捧げる。

ピアノ　土屋律子

東京に生れる。幼少より母に手ほどきを受ける。土肥みゆき氏、松野景一氏に師事。桐朋学園高校音楽科を経て、同大学を1972年、音楽賞を受けて卒業。その間、大島正泰氏、故斉藤秀雄氏(室内楽)に師事。セルジュ・ボド指揮読売日響の「トゥーランガリラ交響曲」など、オーケストラとの協演の他、２回のリサイタル、外山滋氏とのベートーヴェン・ヴァイオリンソナタ全曲演奏、室内楽など、多方面において意欲的な活動を続けている。現在高崎短期大学音楽科講師。

交響幻想曲「伝説」

作曲年代　1941年（モスクワにて着手）～
1943年（東京にて完成）

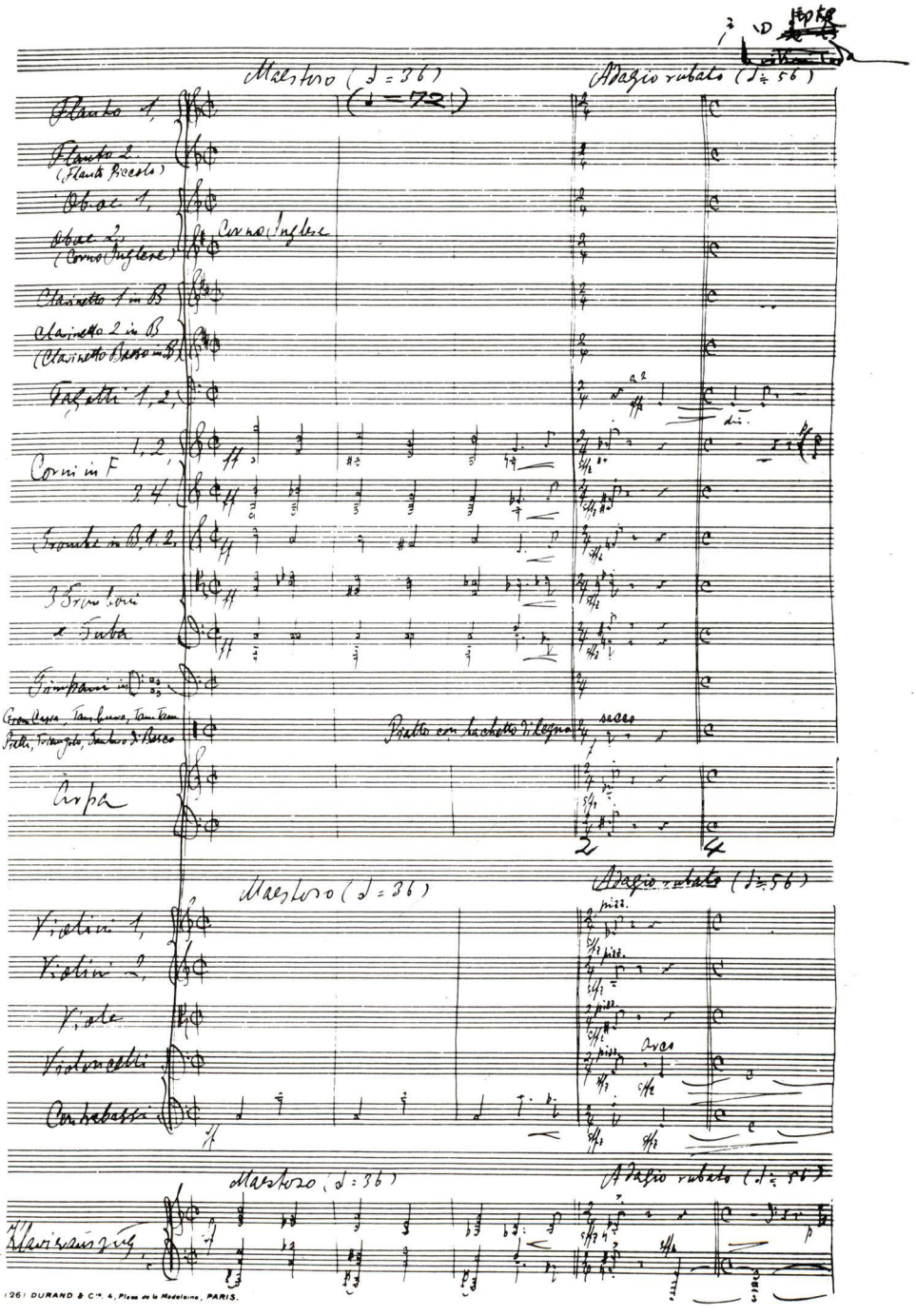
初　　演　1944年5月13日（放送）
坂本良隆指揮　東京放送管弦楽団

受　　賞　第2回ビクター管弦楽懸賞入賞

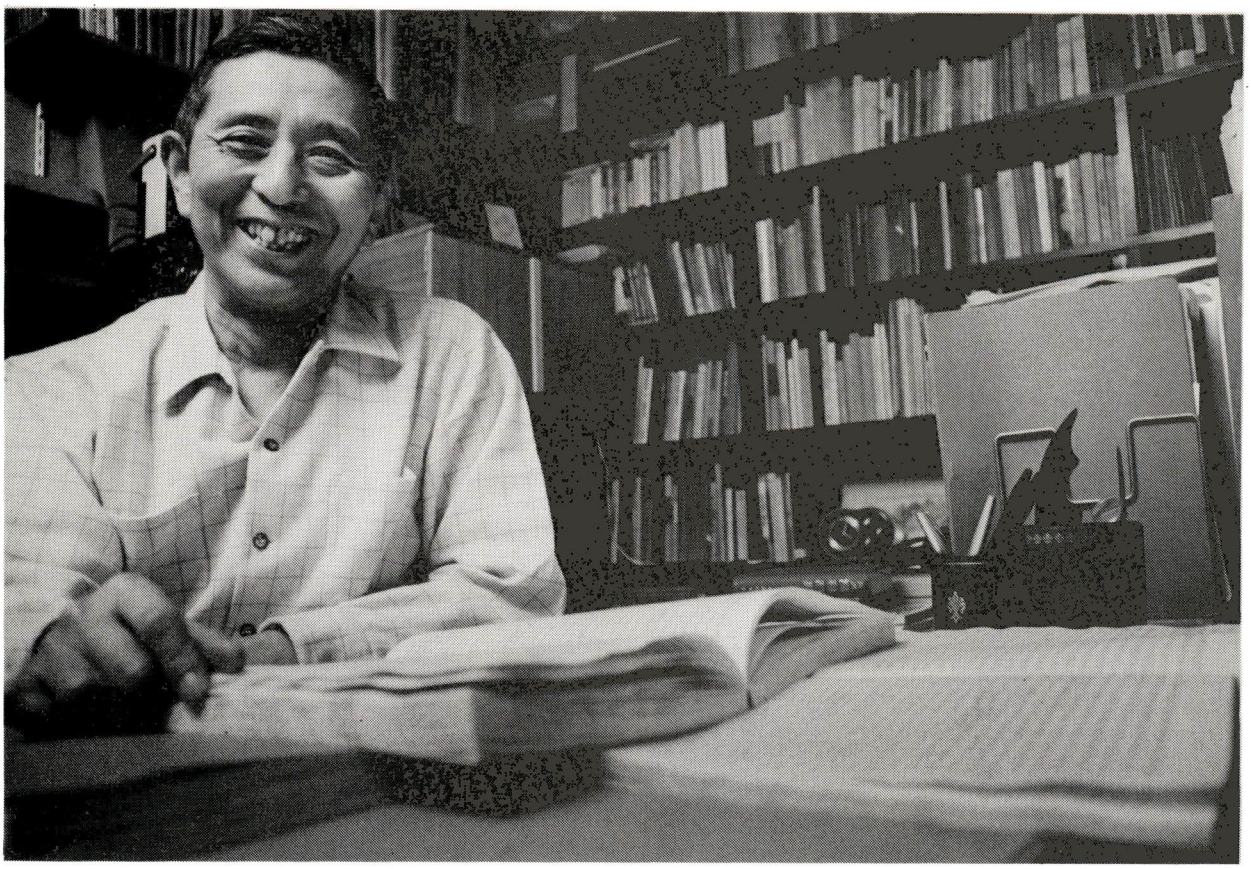
演奏時間　15分

使用楽譜　作曲者所蔵スコア

楽器編成　2 Flauti (II Flau to Piccolo), 2 Oboi (II Corno Inglese), 2 Clarinetti, (II Clarinetto Basso), 2 Fagotti, 4 Corni, 2 Trombe, 3 Tromboni, Tuba, Timpani, Gran Cassa, Tamburo, Tamburo di Basco, Triangolo, Tam-tam, Piatti, Arpa, Quintetto di Archi.



戸田邦雄



写真・木之下　晃

中＝高校（７年制）時代、シューベルトやシューマンの歌曲への傾倒と模作からハイネの詩に導かれ、レクラム文庫や対訳本を買い求めて読み耽ったことがある。その中の古代バビロニアの王ベルシャザールが宴席で心おごり、神殿から運ばせた聖盃で酒を飲み神を冒瀆した言葉を吐いたところ、大きな指が現れて壁上に予言の火の文字を記し、その夜のうちに王は暗殺されバビロニアは亡びたという聖書による物語り詩に幻想をかきたてられた。また大学時代、東大図書館で「古代バビロニアとアッシリアの音楽」という部厚い英書を借り出して読んだこともある。

それから数年後の1941年初め、モスクワの大使館に勤務していた私は、公用でコーカサスを汽車で通り、カスピ海を船で渡り、テヘラン・バグダッド・アンカラを車で廻った。ティグリス・ユーフラテスの流れを目にしたためか、イスタンブールから黒海・オデッサ経由でモスクワに戻るや、学生時代の幻想を再現させ、チャイコフスキーとともに日頃たえず聴かされていたロシア国民楽派の多彩な音色の影響のもとに、舞踊をつけても上演できるような交響幻想曲《ベルシャザール》のスケッチや総譜を二重窓の薄暗い部屋で書いた。

大学時代、弦のパートもプルト（譜面台）の数だけ自分で書いて試作を学生オーケストラでたびたび試演してもらったりしてはいたが、ハイデルベルク大学でポッペン教授の和声のクラスを数ヵ月聴講したのを別にすれば、その頃の私はまだ誰からも何一つ習ってはいなかった。当然、基礎的な技術や構成力の不足を痛感していたので、６月独ソ戦が起こり避難民を満載した引揚列車でシベリア経由帰国するや、柴田南雄君の紹介で諸井三郎先生の門を叩いた。そのとき提出して入門を許されたのがこの交響幻想曲である。総譜に目を通すと諸井先生は「和声と管弦楽法は教えなくてもいいでしょう」とのことで（おかげで教える立場になったとき教え方で苦労した）、主として対位法・数字低音奏法・ソナタやフーガ・楽曲分析等のレッスンを受け、それ以来私の作曲行為はもっと意識的なものになった。

昭和18年（1943）「ヴィクター賞」に応募するに当り、規定に合わせるため、３管編成を〝持替え２管〟に改め、かつ舞台がないと冗長と思われた「聖盃の行進」の部分をカットしてその前後をいささか強引に縫い合わせ、題も具体性のない《伝説》Légende とした。匿名だったため、同時に提出した《交響序曲イ短調》と２曲とも予選を通ってしまったので、審査員会の配慮で《序曲》のほうが伊福部昭氏の《交響譚詩》とともに同年秋、日比谷公会堂で山田和男（現・一雄）指揮の新響（現・N響）で初演され、《伝説》のほうは翌昭和19年（1944）５月、ＮＨＫ内幸町スタジオから坂本良隆指揮の東京放送管弦楽団で生放送・初演された。（総譜の写がその頃の他の日本作品とともに交換船でヨーロッパに送られ、ベルリンで放送されたとの説もあるが定かでない。）

戦後テープが発明されるやＮＨＫ国際局は戦前からの日本楽曲を録音しなおし外国に送る計画をたて、この《伝説》も1956年９月高田三郎指揮の東フィル演奏で録音されてＮＨＫの対外テープ交換の軌道に乗せられた。（私の確認しているだけでもフランスやポルトガルで放送されている。）ステージでは今回が初演である。

曲は、バビロンの夜を思わせる前奏と後奏の間に、「王の主題」と「舞姫たちの踊り」の旋律が展開される。三和音・調性の自己流の音楽――それが私の“青春”であったし“前史”である。
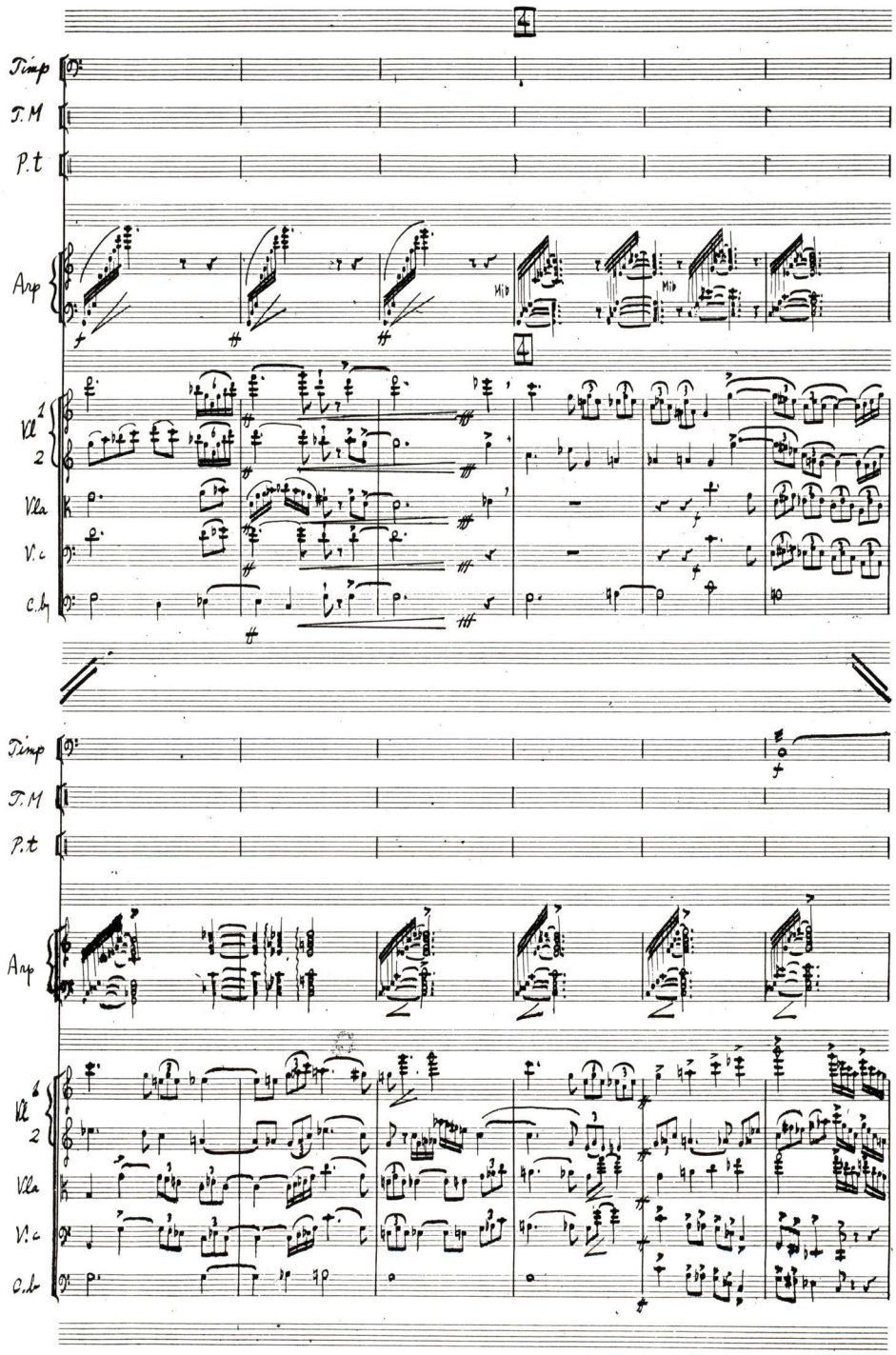
（1983・２記）

交響組曲「野人」

作曲年代　1941年
初　　演　1941年11月21日
山田和男指揮　新交響楽団
(現・N 響)
受　　賞　第10回毎日音楽コンクール１位
文部大臣賞（1941年）
演奏時間　16分

楽器編成　1 Ottavino (Ⅱ Flauto), 1 Flauto, 1 Oboe, 1 Corno inglese, 2 Clarinetti, 2 Fagotti, 4 Corni, 2 Trombe, 2 Tromboni, 1 Basso Trombone, 1 Tuba, Timpani, Tamburo Militare, Tamburo Basco, Piatti, Gran Cassa, 1 Arpa, 1 Piano-forte, Quintetto di Archi

使用楽譜　音楽之友社版



（第２楽章の一部）

渡辺浦人



写真・木之下　晃

「野人」を作曲した頃の思い出

私は練馬の石神井川のほとりの「赤い三角屋根の家」から桜台の駅まで，約1500メートルの道を毎日歩いて通っていました。

交響組曲「野人」の第三楽章は，この道を歩きながら作ったのです。

その頃の桜台は駅の近くまで畠で，ところどころに雑木林があり，百姓屋の庭には大きな欅や樫の木がそびえていました。

人通りも少なく，小鳥の声がきこえてくる道を，私は元気よく「アレグロ」のリズムにのって歩きます。

心にハーモニーをうかべ，メロディーを口ずさみながら歩きます。

メロディーはたったの４小節の単純なものですが，16小節の打楽器だけの部分につづいて，十数回いろいろと形を変えて演奏され，終りは打楽器の部分につづいて主題を大きく演奏し，名刀でたち切ったように終ります。

第二楽章は小さい時，母に歌ってもらった子守唄です。母は若いころ教会のオルガン弾きでしたから，讃美歌だったかもしれません。私の心にあったなつかしいその子守歌が主題になって，中間部に高々と演奏されます。前奏と曲の終りの部分は，私の父母に対する「祈り」の心です。

この楽章は管楽器を全部休ませ，弦楽器とハープ，打楽器だけで演奏されます。

第三楽章は約１か月，第二楽章は10日間ぐらいで作りましたが，最後になった第一楽章が大変です。曲と曲との対比，構成がむづかしいのです。毎日毎日歩きながら考えつづけ，親友の早坂文雄さんにも相談し，３日にあげず訪問したり，我が家へ来てもらったりして一緒に考えてもらい，早坂さんのピアノ，私のヴァイオリンで，二楽章や三楽章を演奏してみては，一楽章を考えるのです。夜おそくまで議論することもありました。

ある日，私は日本の雅楽が笛一本で始まり，だんだん楽器が増えてゆく形式をとり，何回もくりかえされてゆくことに気がつき，この方法をとることにしました。早坂さんも賛成してくれました。

中間部に８分の３拍子と４分の２拍子を交互に演奏するところが40小節ほどありますが，またもとの主題に返って，静かに終るようにして出来上りました。

このような状態であったので，昭和16年のコンクールに間にあいそうにもなかったのですが，今は音楽評論家で当時大学生であった富樫康君が，清書を引きうけてくれてやっと間にあったのです。

その年の10月，この曲は１等になり，文部大臣賞を受けたのですが，１か月半もたたない12月８日，日本は世界を相手に戦争を始めてしまったのです。
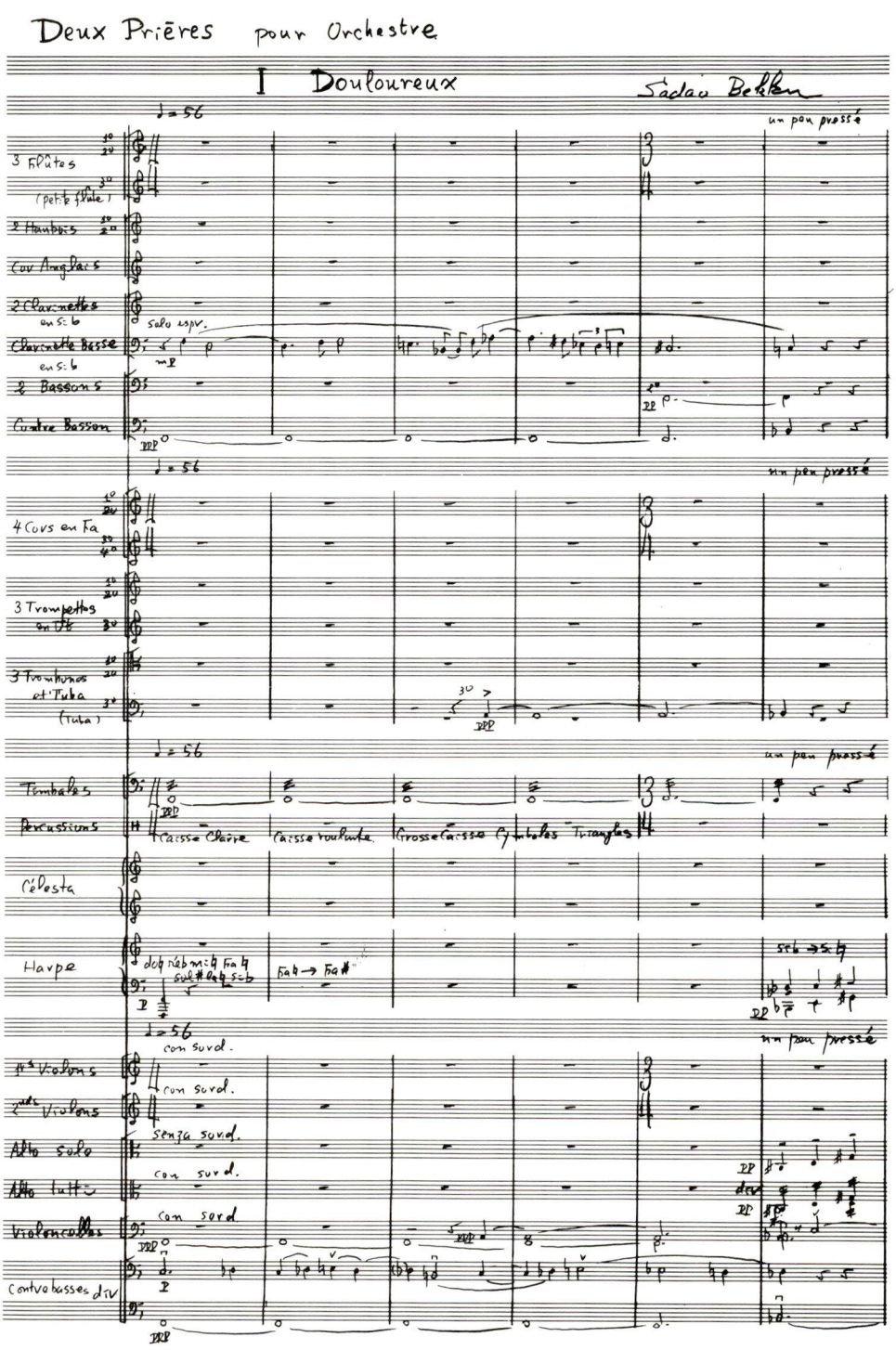
もう作曲どころではありません。これから私にも苦難の日々がつづいたのです。

管弦楽のための「二つの祈り」

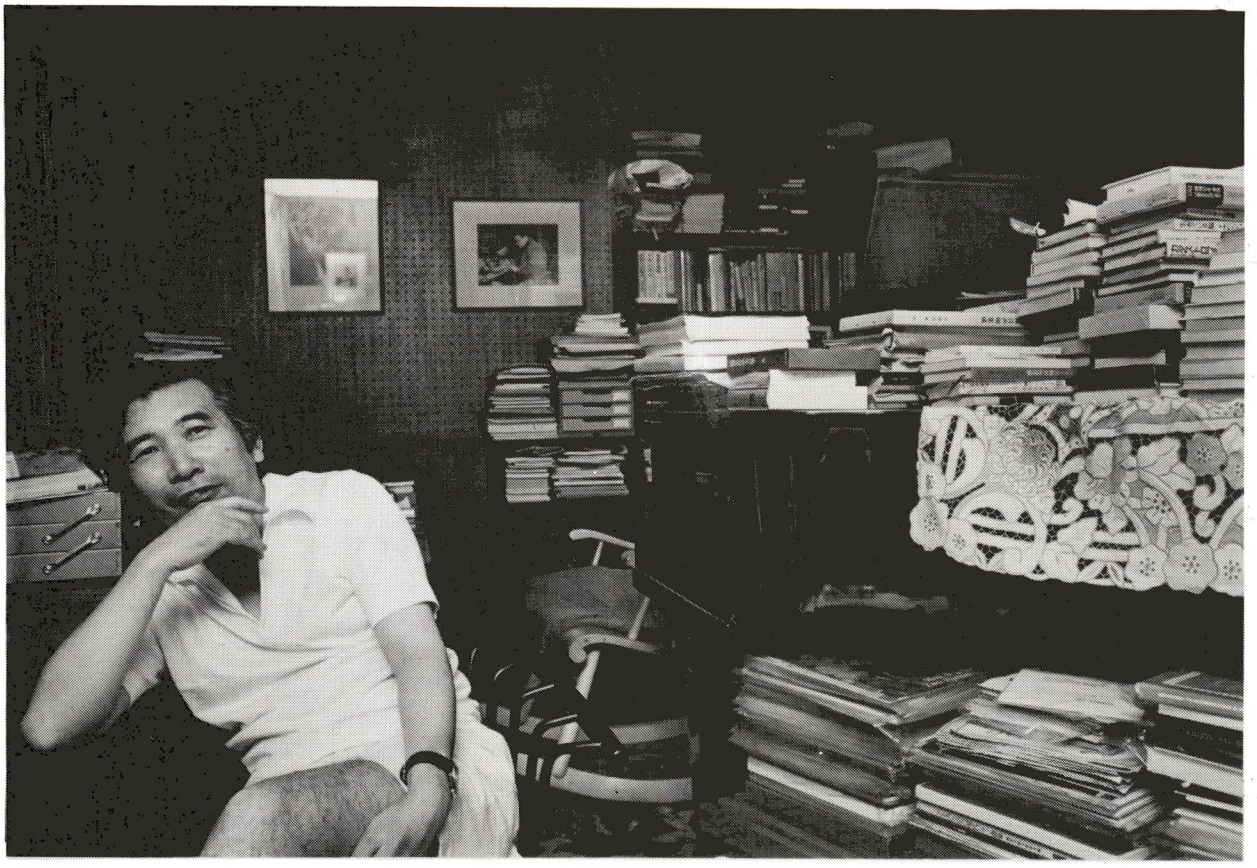
作曲年代　1956年
初　　演　1956年５月10日
斎藤秀雄指揮　東京交響楽団
(第78回定期演奏会)
受　　賞　第５回尾高賞（1956年）
毎日音楽賞
演奏時間　15分

使用楽譜　音楽之友社版

楽器編成　3 Grandes-Flûtes (Ⅲ Petite-Flûte), 2 Hautbois, 1 Cor Anglais, 2 Clarinettes, 1 Clarinette Basse, 2 Bassons, 1 Contrebasson, 4 Cors, 3 Trompettes, 2 Trombones, 1 Trombone basse, 1 Tuba, Timbales, Caisse claire, Caisse roulante, Grosse-Caisse, Cymbales, Tam-tam, Triangle, Celesta, Piano, 1 Harpe, Quintette à cordes



別宮貞雄



写真・木之下　晃

わが音楽的青春始末

敗戦の翌年の春，前年に行われなかった毎日コンクールがかわりにひらかれて，私の「管弦楽のための二章」が演奏され，入賞した。私が書いたはじめての作品，24才の時のものである。芥川さんは，これと「二つの祈り」とを混同されていて，実はこちらの方を上演したかったようなのだが，かんちがいをいいことに，それは勘弁していただいた。とてもはずかしくて，今更皆様にきいていただく気にはなれない，何せ生れてはじめてまとめた曲なのだから。

私は音楽の道に入ったのがとてもおそかった。こどもの頃からレコードで名曲をきくことだけはしていたが，妹のみようみまねでピアノにさわったのが，中学も卒業する頃だし，旧制高校時代には趣味としては深入りするようにはなっていたが，池内友次郎先生の門をたたいたのは，大学に入ってからである。物理学者になろうと志をかためたのと，並行してというのは変かもしれないが，たしかトーマス・マンの芸術論の影響で，あやふやな芸術とのつきあいにあきたらなくなったのである。

デュボアの教科書で和声の初歩からはじめたのだが，もう昭和19年，戦いもたけなわで，なんとか和声法と対位法の初歩を型どおりおえる位で，敗戦。大学には研究生活の環境などとても整わないままに，好きな音楽に没頭した。それでも三月には大学は無事卒業した。そんな中で，先生にすすめられてとりくんだのが，件の作品である。生意気にも先生の指導に背をむけて幼稚な自己流に固執した記憶はある。大したものが出来るわけはないのだが，ただリディア調の旋律が少しばかりチャーミングであったからか，まさか入賞などまじめに考えてもいなかったのに，第2位ということになった。これが私の人生の方向転換のきっかけである。受賞のことよりも，はじめて聞いた自分のオーケストラ作品の美しさ，（別に大したことではなく，しかるべく書いてあれば，オーケストラというものはいい音を出すものである。）から受けた感銘，それが病みつきになったのだろう。

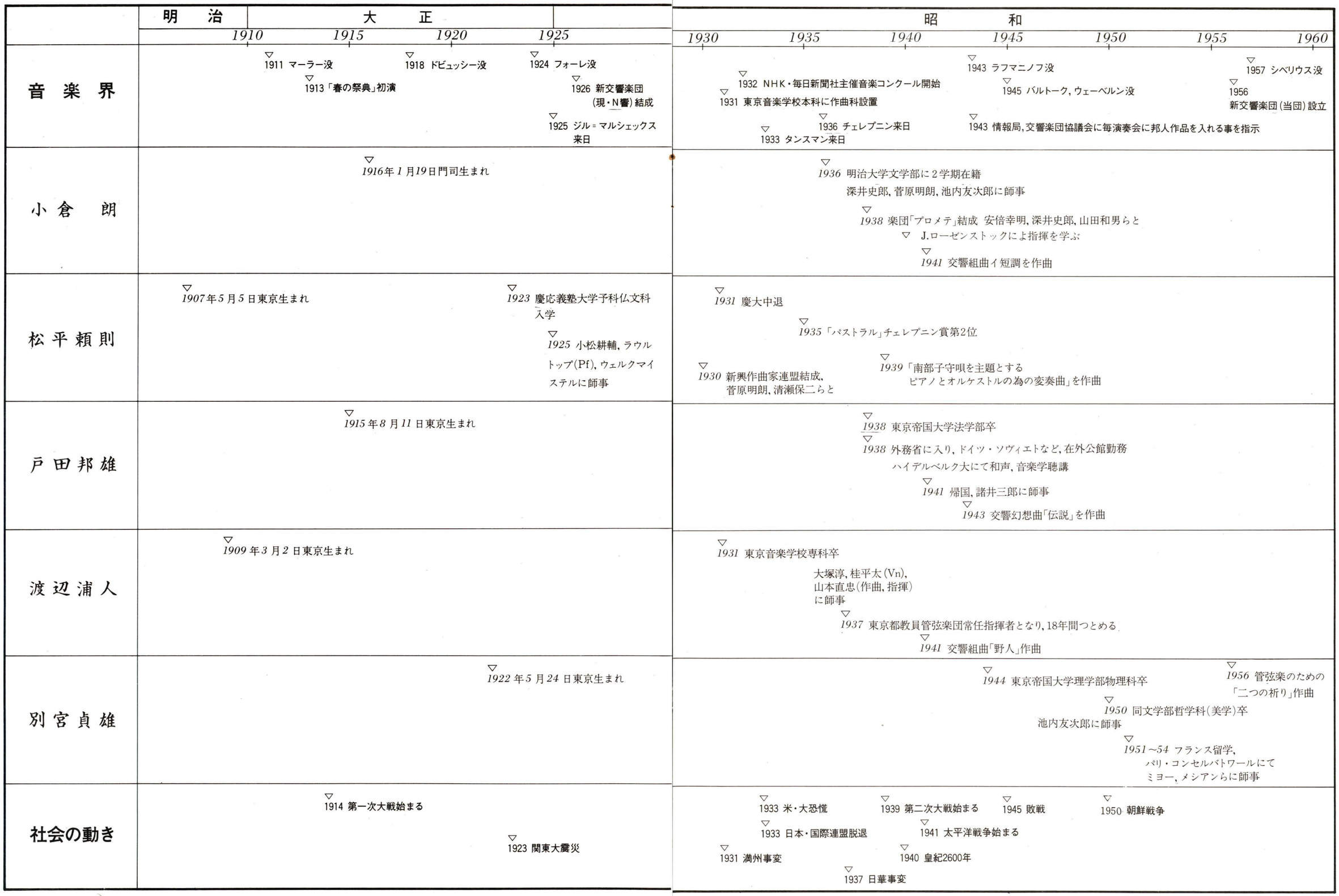
翌昭和22年秋にも，コンクールに応募した。「管弦楽のための古典組曲」というもので，バッハの古典組曲と，ラヴェルの「クープランの墓」が着想のもとであった。音はとてもラヴェル風とまでゆかなかったが，いくらかフランス趣味であった。これでも第2位ということになった。そしてそのあとで小倉朗さんにされた批評が私を大きく変えたのである。彼にモダニズムの浅薄さと，ドイツ古典の偉大さについて，説教された。だがはじめは，私にとってこれはマイナスであった。あらためてベートーヴェンを勉強したりしたのだが，かえって曲が書けなくなった。その頃の作品で今のこっているのは歌曲だけである。

大学の理学部をでてから，文学部美学科にいたのだが，そこも卒業となり，いよいよ自分の一生をどうするか，決心する必要があった。

何とか作曲家になりたいと思った。それで昭和26年8月渡仏，パリ国立音楽院のフューグ科と作曲科に入った。そこいらの話は書けばきりがないが，要するに職人的技術を身につけた。それからミヨーから自由の尊さを学んだ。メシアンにも影響を受けた。3年間いて，最後にまとめた作品は管弦楽のための「序奏とアレグロ」である。

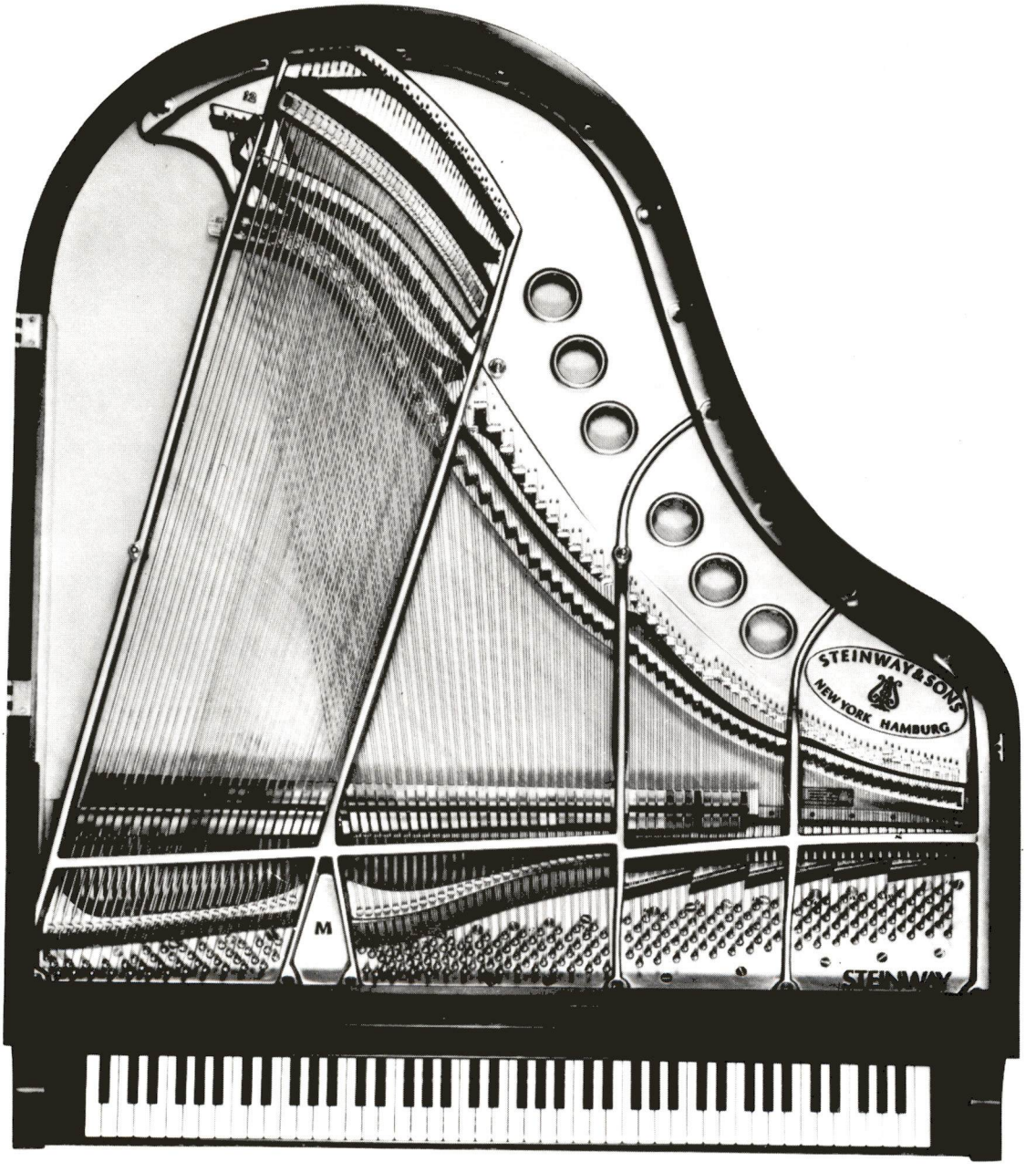
帰ってから室内楽作品発表会をしたりしたが，翌々昭和31年，当時毎回日本人の作品を上演していた東京交響楽団の定期演奏会のために，書き下したのが，この「二つの祈り」である。つまり私にとって4曲目の管弦楽作品になる。34才の時のもので，果して青春の香が残っているかどうか，心もとないが，私はひとより10年も後れて音楽の勉強を始めたのだから，そのことを考えれば，青春の作品といってもおかしくはないだろう。少くとも修業時代をしめくくる作品といえよう。5月10日斎藤秀雄先生の指揮で初演された。第1楽章は前奏曲，第2楽章はファンファーレ付のフーガとも考えられる。終りのストレッタに重なる金管楽器の旋律はグレゴリオ聖歌のクレドによるものである。

作曲のころ


明治
大正
昭和
1910
1915
1920
1925
1930
1935
1940
1945
1950
1955
1960
音楽界
1911 マーラー没
1913「春の祭典」初演
1918 ドビュッシー没
1924 フォーレ没
1926 新交響楽団(現・N響)結成
1925 ジル＝マルシェックス来日
1932 NHK・毎日新聞社主催音楽コンクール開始
1931 東京音楽学校本科に作曲科設置
1933 タンスマン来日
1936 チェレプニン来日
1943 ラフマニノフ没
1945 バルトーク, ウェーベルン没
1943 情報局, 交響楽団協議会に毎演奏会に邦人作品を入れる事を指示
1957 シベリウス没
1956 新交響楽団(当団)設立
小倉朗
1916年1月19日門司生まれ
1936 明治大学文学部に2学期在籍
深井史郎, 菅原明朗, 池内友次郎に師事
1938 楽団「プロメテ」結成 安倍幸明, 深井史郎, 山田和男らと
J.ローゼンストックによ指揮を学ぶ
1941 交響組曲イ短調を作曲
松平頼則
1907年5月5日東京生まれ
1923 慶応義塾大学予科仏文科入学
1925 小松耕輔, ラウルトップ(Pf), ウェルクマイステルに師事
1931 慶大中退
1935「パストラル」チェレプニン賞第2位
1930 新興作曲家連盟結成, 菅原明朗, 清瀬保二らと
1939「南部子守唄を主題とするピアノとオルケストルの為の変奏曲」を作曲
戸田邦雄
1915年8月11日東京生まれ
1938 東京帝国大学法学部卒
1938 外務省に入り, ドイツ・ソヴィエトなど, 在外公館勤務
ハイデルベルク大にて和声, 音楽学聴講
1941 帰国, 諸井三郎に師事
1943 交響幻想曲「伝説」を作曲
渡辺浦人
1909年3月2日東京生まれ
1931 東京音楽学校専科卒
大塚淳, 桂平太(Vn), 山本直忠(作曲, 指揮)に師事
1937 東京都教員管弦楽団常任指揮者となり, 18年間つとめる
1941 交響組曲「野人」作曲
別宮貞雄
1922年5月24日東京生まれ
1944 東京帝国大学理学部物理科卒
1956 管弦楽のための「二つの祈り」作曲
1950 同文学部哲学科(美学)卒
池内友次郎に師事
1951～54 フランス留学, パリ・コンセルバトワールにてミヨー, メシアンらに師事
社会の動き
1914 第一次大戦始まる
1923 関東大震災
1933 米・大恐慌
1933 日本・国際連盟脱退
1931 満州事変
1939 第二次大戦始まる
1941 太平洋戦争始まる
1940 皇紀2600年
1937 日華事変
1945 敗戦
1950 朝鮮戦争

伝統と手作りが生んだ
世界の逸品

STEINWAY & SONS



■美しいカタログを用意しております。機種名をご記入の上、お申し込みください。
■お求めやすい長期ローンのお取り扱いをしております。ご利用ください。

日本総代理店 株式会社 松尾楽器商会

東京都港区芝大門1丁目9番1号(SKFビル) TEL.(436)4331㈹
国電：浜松町駅下車7分　地下鉄：大門駅(都営浅草線)　御成門駅(都営三田線)下車4分

いいものだけを世界から



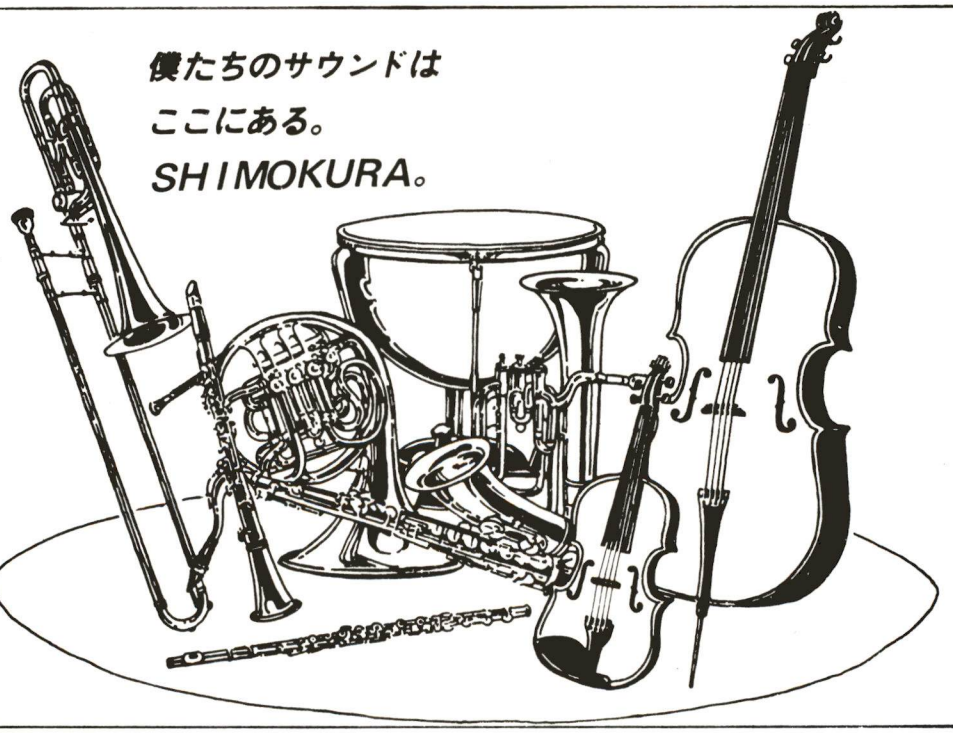
VOLKSWAGEN
Golf

SOMETHING ELSE

こんなことばがフォルクスワーゲン ゴルフにはピッタリ。
なにか不思議な魅力をも兼ね備えた世界の名車。
それがフォルクスワーゲン ゴルフです。

good new days
人間らしい美しい未来を
ヤナセ

総輸入元 株式会社ヤナセ
フォルクスワーゲン・アウディ事業部
東京都港区芝浦一丁目6-38
〒105 TEL03(452)4311



僕たちのサウンドは
ここにある。
SHIMOKURA。

管・弦・打楽器の総合専門店 ● U.S.A.キング日本総代理店

SHIMOKURA 神保町 下倉楽器店

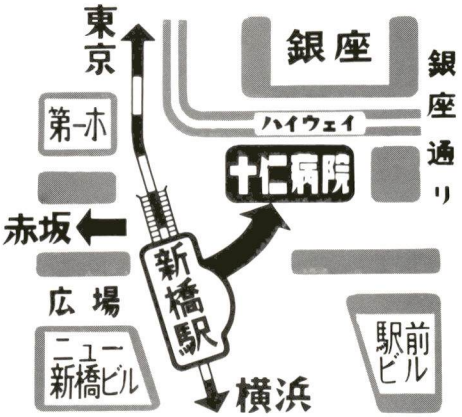
〒101 東京都千代田区
神田神保町町1－9

☎(03)294-4351(代)

COSMETIC SURGERY

美容外科

（眼.耳鼻咽(こう).歯.皮フ科）



東京・新橋駅（銀座口）前

地下鉄銀座線5番出口　　日・祝日も診療　入院設備有り

院長
梅澤文雄

十仁病院

☎03(571)2111～8

「回す」

●エンジンの多様化、
高性能化に応えたエンジンオイル

いま車の世界はターボチャージャー装着、DOHC方式、超軽量エンジンなどが次々に登場し、エンジンはますます多様化、高性能化へ。それに伴い、エンジンオイルには今まで以上に優れた省燃費効果、ロングライフ性能、そしてオールシーズン性能など、さまざまな対応が求められています。このようなニーズに十分応えているのが、PAN-Xモーターオイルをはじめとする日本石油の自動車用エンジンオイル〈PANシリーズ〉です。

●ガソリン車、ディーゼル車、
そしてターボ車やバイクにも

PAN-Xは、日本石油の代表的な省燃費型ガソリンエンジンオイル。最もポピュラーなオイルとして、ドライバーのみなさまに愛されています。また、新発売のニューPAN-Aは最高級のガソリンエンジンオイル、PANディーゼルターボは高性能ディーゼルエンジンオイルで、いずれもターボ車に適した省燃費効果の優れたオイルです。さらにPANサイクロスーパーは、特に排気煙を少なくした2サイクルエンジンオイルとして開発されました。

〈PANシリーズ〉はパッケージデザインもすべて一新、新しい時代にマッチしたエンジンオイルとして、みなさまのカーライフのお役に立っています。

■日本石油の自動車用エンジンオイル

PANシリーズ

石油を活かす　日本石油

祝

新交響楽団第99回演奏会

東京音楽アカデミー

東京都渋谷区鉢山町15―5 〒150

PHONE 462―5711～3

